

令和元年度 写真部門 総評

鳥原委員

「インスタ映え」が流行語になるほど、写真は社会にあふれています。写真は誰にでも撮れるとも言われます。そのぶん、映像や写真に対する人々の感度やセンスがとてつもなく上がっています。もちろん自治体の写真も例外ではなく、みなさんが丹精を込めて作った広報誌が、他の多くの広報媒体のなかに埋もれてしまうかもしれません。

審査を担当して気が付いたのは、事前にしっかりと撮影計画からレイアウトまでの計画を練ることの必要です。写真と文字情報では訴求する内容が違ってきますが、あらかじめそれをよく検討したと思しき作品はいずれも高い効果があると思われました。一方で、なんとなく撮ったように感じられたものは、レイアウトでずいぶん苦労しているように見て取れましたし、点数的にも低いのです。講評を読んでいただくと、それが尚よくわかっていただけたと思います。

後方の目的にかなうよう、撮影・レイアウト・印刷までを一貫して構想する。このヴィジュアルコミュニケーションの基本を心掛け、より効果的な候補言う活動を期待するしだいです。

箭内委員

この度、写真部門の審査を担当させて頂いた写真家の箭内博行です。

当該コンクールは私にとって初めての経験でしたが、私なりに各作品と真摯に向き合い、客観的かつ公平に、精一杯審査させて頂きました。

では、以下に総評を申し上げます。

<総評>

今回、写真部門には28の区市町からご応募頂きました。「1枚写真の部」作品数27点。「組み写真の部」16点。応募総数43点。どの作品からも、広報を通して住民の皆様にご伝えたい！というメッセージ性と創意工夫が感じられる、力作揃いとなりました。

まず表現力ですが、「1枚写真」で高評価だった写真は、それ1枚で掲載ページ全体のメッセージ性を表現している、際立って<写真の力>を感じさせる作品でした。そして同時に、それは秀逸なレイアウトによって掲載された作品でもありました。ここで言う秀逸なレイアウトとは、写真の訴求力（訴える力）を最大限にいかすために余計な情報を削ぎ落とし、よりその写真に読者の目をフォーカスさせるレイアウトということです。たとえ力のある写真でも、ページ内での扱いによっては印象がガラリと変わってしまいます。撮影者とページ編集者との共通理解が、より良い作品を生み出したという印象です。

「組み写真」で高評価だった作品は、複数の写真の持つメッセージ性、テイスト、色彩などをバランスよく計算し、それらがより効果的に見えるようにレイアウトされた作品でした。やはりここでも撮影者とページ編集者との共通理解が重要になってきますが、1枚写真と違う点は、写真の組み合わせとセレクトが非常に重要になるという点です。たとえ複数が秀作揃いでも、それらが全て似たテイストであれば、読者は違和感を覚えます。そのため、先述のような、より効果的なバランスが重要になってきます。

次に技術力ですが、こちらは全体を通してバラつきが見られました。委託業者には当然ながら安定感がありましたが、特に一般職員の中で、技術が伴って撮影されている作品と、そうでない作品との差が明確にあらわれていました。

特に目立ったのは、高性能カメラによって結果的に撮れてはいるものの、その場面・その被写体にふさわしくない露出で撮影されている例。そしてもう一

つ、屋外撮影で人物の顔が陰になってしまい、編集段階で無理に明度を上げて
いる例。これらの中には、目のつけ所が良い作品も多かっただけに、非常に勿
体ないと感じました。

大人数を鮮明に写し込みたい場合には絞りを深くする。動きの速い被写体にはシャッター速度を速める。屋内ではISO感度を上げる。日中屋外での撮影では敢えてストロボを使用した<日中シンクロ>撮影も想定しておく。これら基本的な技術を念頭に置くだけで、取材撮影時に心の余裕が生まれ、写真の出来栄えも変わると思います。

技術面でもう一つ。今回、スマートフォン（以下スマホ）による作品が何点かありました。確かに今のスマホは高性能ですが、スマホが撮影意図を十分に反映させられる機材かという点に甚だ疑問です。また、取材の場合には、撮られる側は撮影者の姿勢・意気込みも見ていますから、その点も予め承知しておきたいところです。ただ、災害時などの緊急時には、現代においては非常に有効なツールであることは間違いないでしょう。

最後にキャプション・レイアウトですが、レイアウトは先述の<表現力>の中で言及したので割愛いたします。

キャプションは、短文でも非常に重要な役割を担っています。これが有ると無いのとで、評価が分かれた作品が実際に何点かありました。作り手には当然と思われることも、意外と読者には伝わりづらいものです。そこで有効なのがキャプションです。たったひと言でもそれが有ることで、読者は写真の向こう側へ思いを巡らすことができます。ぜひ読者の目線で、丁寧なひと言を心掛けて頂けたらと思います。

当コンクールは写真愛好家によるコンクールとは違うので、特に技術面でどこまで突っ込んだ審査を行うかに悩みましたが、皆様のさらなる技術向上を願い、作品一点一点に真摯に向き合い審査をさせて頂きました。参加者の皆様には、ぜひ今回の結果を参考にして頂き、より充実した紙面作りで、住民生活向上の担い手となって頂くことを切に願っております。